

修験道の教典形成と天台宗

宮家 準

序

修験道は平安時代に霊山で修行した法華持経者などを淵源としたことから⁽¹⁾法華経を依経とする天台宗と密接に関わって成立展開した。そして彼らが修行した熊野、金峰、大峰などを修行道場とし、役小角（行者）を始祖として崇めている。この天台宗との結びつきの端緒は、寛治4年（1090）に白河上皇が熊野、同6年に金峰山に御幸され、熊野御幸の先達を務めた天台宗寺門派園城寺の増誉を熊野三山検校に叙されたことにある。爾来園城寺の門跡がこの職を襲い、15世紀後半からは同寺末の聖護院門跡が重代職として、熊野先達を掌握して、修験道界を支配した。

一方天台宗の山門派では円仁（794-864）の弟子相応（831-918）が、比叡山の堂社を巡拝し、無動寺を開き、中世後期には回峰行の祖とされた。この比叡山の修験道は熊野、大峰を中心とする南山系の修験に対して北嶺修験と呼ばれている⁽²⁾。こうした背景があったことから近世期には山門の幸運の『北嶺行門記』や寺門の志晃の『寺門伝記補録』では、ともにその立義は顕、密、修験の三道を中核にするとしている⁽³⁾。

周知のように院政期から近世初頭の中古天台では天台本覚思想が中核をなしていた。この思想では現象界の諸相を越えたところに存在する究極の悟りを本覚と捉え、その普遍性を説いている。その教えや伝承は密教の儀軌などの秘法伝授の影響もあってか、口伝または切紙の形で師弟間で秘密裏に伝授され、それを示す系譜や血脈が作られている。そしてその教典は個々の切紙や口伝を集成する形をとっている⁽⁴⁾。そこで本稿ではまず白河上皇がそれを聞いて熊野御幸や金峰山詣をされ、中世後期以来歴代熊野三山検校が相伝したとされる『大峰縁起』をとりあげる。次いで天台本覚思想の流れをくむ光宗がまとめた『溪嵐拾葉集』の修験に関する記事、修験道の確立を主導した即伝の『修験修要秘決集』、教派修験確立後に成る園城寺の志晃（1662-1730）の修験に関する記事の紹介を通して、修験道の教典形成と展開に見られる天台宗の影響について考察することにしたい。

I 『大峰縁起』とその継承

1. 『大峰縁起』の性格と意義

鎌倉後期になる『熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記』には、『大峰縁起』に関する次の記事がある⁽⁵⁾。その第1は延久2年（1070）8月1日に熊野本宮証誠殿の後四間廊に御聖体の間を設けて、『大峰縁起』を安置したとの記事。第2は寛治3年（1089）10月15日に白河上皇に長円が熊野権現鎮座の因縁を申し述べた。そこで上皇は同4年長円を同行させ、増誉を先達、長円の弟子覚尋を小先達として、熊野に御幸され、『大峰縁起』を御覧になった。その折、園城寺の隆明

(1030-1104) が読み人を務めたが読めなかったので大江匡房がこれを読んだとの記事。第 3 は白河上皇は『大峰縁起』に触発されて、寛治 6 年に金峰山に御幸されて、そこでも本縁起を御覧になったとの記事である。このほか、13 世紀後期になる『金峰山雜記』には、後鳥羽上皇が元久元年(1204)に金峰山に『大峰縁起』を奉納され、それを納める為に宝庫を造られたとある⁽⁶⁾。これらから推測すると、『大峰縁起』は中世期には貴紳を熊野詣、金峰詣、大峰修行に誘うよすがになっていたと考えられる。そして近世になって、聖護院を本寺とする本山派が確立すると、役行者とその十代弟子に始まる歴代聖護院門跡の系譜では、大峰修行を行ない、『大峰縁起』を相伝することが、熊野三山検校・本山派の統領となる資格とされているのである⁽⁷⁾。

この『大峰縁起』について、近世末の修験の学匠行智はその著『木葉衣』の中で「大峰縁起今ニ是ヲ見ザルヲ憾トス。蓋シ今アリヤナシヤ」と慨嘆している⁽⁸⁾。このように当時『大峰縁起』がいかなる書物だったかは定かでなかったのである。ただ現在はその内題に「大峰縁起、葛木縁起、一代峰縁起」とある鎌倉初期になる『諸山縁起』冒頭の「大菩提山仏生上要之事」の項、天理大学と京都大学所蔵の『大峰縁起』と表記された写本とする二説がある⁽⁹⁾。前者は大峰山系の峰々を胎蔵界、金剛界曼荼羅の諸尊鎮座の靈山とし、このそれぞれへの貴紳の仏像、経、法典などの奉納の記録である⁽¹⁰⁾。後者は鎌倉初期に行俊が大和国葛上郡石井荘が『大峰縁起』所掲の役行者以来自分が相伝した土地として、その所有権を主張したとの史実にもとづくものである⁽¹¹⁾。事実天理本・京大本『大峰縁起』には、この行俊相伝の事が記されている。そこで本稿では史実の裏付けがある後者を歴代聖護院門跡が相伝した『大峰縁起』と想定して、その内容を紹介することにしたい⁽¹²⁾。

この『大峰縁起』は別個の伝承を羅列したもので、若干の重複も認められる。ただ大凡の内容は 1. 熊野権現・金剛蔵王菩薩の本縁や神格、2. 役行者の三生と修行、3. 大峰山中の靈地と峰入、4. 縁起・仏舍利・土地の相伝や灌頂血脈に分けることが出来る。なお川崎剛志はこの『大峰縁起』の熊野や金峰の由来、神格と縁起の相伝や血脈の部分は『熊野三所権現・金峰山金剛蔵王縁起』、熊野本宮・新宮・那智の由来は『熊野三所権現金峰金剛蔵王降下御事』、役行者伝や仏舎利の相伝は『役優婆塞事』(いずれも真福寺蔵)とほぼ同文であること、大峰山中の秘所に関する事項は『大峰秘所記并縁起』(竹林院蔵)にもとづくとしている。そしてこれらを証拠として、鎌倉初期に役行者誕生地の石井荘の相伝を主張した行俊の名も入れた、この『大峰縁起』が、南北朝初期に上記の諸書をもとに編まれたと推測している⁽¹³⁾。以下上記 1~4 の順にその内容を紹介する。

2. 熊野権現と蔵王権現の本縁と神格

熊野権現の本縁は中天竺摩竭提国の浄飯王(釈迦の父)の 5 代目で天照大神の 5 代目でもある慈悲大頭王である。その家臣の雅頭は王の命で靈鷲山と檀徳山で円頓 28 軸、法華 7 軸、同安樂行品第 14 を誦して 45 年間修行して飛行自在となった。そして日本の衆生を救う為に檀徳山と靈鷲山に準えた熊野と金峰にそれぞれの権現が垂迹することの許可を神武天皇から得る為に葛上郡新井郷に来た、としている。ただ熊野三山への権現の降臨譚はそれぞれ異なっている。すなわち本宮では神武天皇 58 年に証誠殿と両所権現が本宮備崎の楠に降臨したとする。ただ別伝では

孝安天皇の御代に熊野十二所権現が海上の船の艫から藤代にいた役行者の前に示現し、切目、稲持、滝尻、発心門をへて本宮の蓬莱島に降臨した、としている。新宮では天照大神を祀る内宮と外宮から三頭の熊が走り出たのを獵師の是与が射たところ、熊は新宮の西北の岩（神倉）で三枚の鏡と化した。そこで彼が裸行聖人と共に覆屋を作って祀ったのが熊野三所権現である、とする。那智では裸行が那智の南浦和多で水浴をしていると、千手観音が現れて滝に導いたのでそこに祀り、さらに山上に十二所権現を勧請した。裸形の本地は如意輪観音で、その庵室が如意輪堂であるとする。

熊野十二所権現のそれぞれの本地は、証誠殿は慈悲大頭王、その妻は雅頭の娘である。夫妻には娘の結と息子の速玉がいた。そして結は甘露大王の第二王子と結婚して若宮命子、児宮命子、子守命子の三女を儲け、速玉は長寛長者（稲荷大明神）の第一女と結婚して、禪師宮と聖宮（共に僧形）を儲けた。雅頭は勧請十五所となった。一万眷属・十万金剛童子、飛行夜叉、米持金剛は王の家臣である。熊野十二所権現に詣でると、現世安穩、後世善処、悪魔降伏の利益があるとされている。

金峰山の金剛蔵王権現は中天竺波羅那国の金輪聖王 7 代目の率渴天女の子率渴大王である。この日本の金峰山は霊鷲山を移した山で、法華経を書写して持参すると、現世は安穩で百年の寿命を得、後世は善処に導かれるとしている。このほか熊野山は胎蔵尊、金峰山は金剛尊ともされている。

3. 役行者の三生とその修行

役行者の初生は中天竺の昭王 4 年に生まれた慶摩童子である。童子が 21 才の時、浄飯王の太子（釈迦）が生まれた。太子は 19 才で出家し能忍と名乗り、檀徳山・霊鷲山で修行した。慶摩も共に出家し智教と名乗り、霊鷲山で能忍の 8 年にわたる法華経の説経に接した。能忍は 79 才で入滅した。智教はその遺体から 2 粒の舍利を取り、翌日 99 才で入滅した。

第二生はその 347 年後に中天竺で雅頭長者の姉と真覚長者の子として生まれた。その子は 3 才になるまで両掌を開かなかった。3 才になった釈迦の涅槃の 2 月 15 日に両掌を開くと 2 粒の仏舍利を握っていた。そこで金剛三蔵が塔を建てて仏舍利を納め、法華経を講じると 160 粒になった。その子は 19 才で出家して顕覚と名乗り、霊鷲山で法華経を書写して修行し、135 才で入滅した。

第三生は役行者である。その母は第 25 代武烈天皇の時に、勅命を受けた金村大臣に殺された真鳥大臣の娘である。彼女は葛上郡茅原村に逃れて高賀茂氏を名乗った。そして 24 才で熊野詣をした際に、月を飲んだ夢を見て妊娠した。丁度その時やはり 24 才の継体天皇の后が同じ日時に太陽を飲んだと観じて妊娠した。そして 2 人は同じ日時に出産した。

役行者の誕生の地には茅原堂が建立され福田寺領が与えられた。その四至は北は石井、南は新井郷、西は葛城峰、東は小山である。役行者の 5 代弟子がこの地を相続したが、既述のように行俊はその流れをくむとして同地の所有権を主張したのである。役行者は 9 才で出家し、25 才の時に熊野に詣でて自己の三生について教えられ、『大峰縁起』を相伝した。一方継体天皇の王子は即位して欽明天皇となった。その治世中に百濟王から仏像、経典が献じられた。

役行者は熊野権現の教えに従って 19 才の時に 12 月晦日に大峰山に入り、100 日かけて 4 月 1 日に金峰山に至り、金剛蔵王権現に見えた。そして金峰山で一夏九旬の間採花汲水の修行をしたうえで、7 月 16 日に大峰山に入り、70 日かけて熊野に至った。爾来 45 年間にわたって順（熊野・南から金峰・北）、逆（金峰・北から熊野・南）の大峰抖擻を行った。この大峰で修行した者は法華経の「薬王菩薩本事品第 23」により病を直し、「信解品第 4」によって珍宝を得、不動明王の呪によって悪魔や邪気を除きうるとされた。なお役行者は唐では第 3 の仙人、金剛山では法喜菩薩、箕面寺では龍樹、箕面の滝では不動明王として化現したとしている。

4. 大峰山中の宿と霊地

大峰山中の宿に関しては、『諸山縁起』所収の「大峰の宿名百廿所」とほぼ同様の「大峰宿の次第」に熊野宿から剣光童子に至る 77 の宿と、大峰八大童子の在所の禅師宿（檢増童子——以下宿と童子を略す）、多輪（後世）、笹の岩屋（虚空）、篠（剣光）、玉木（悪除）、深仙（香精）、吹越（除魔）、大峰山中の深仙、別教岨、入宿、月見岨、笹岨、慈童子岨、土曜岨、馬頭岨をあげている⁽¹⁴⁾。このうちの深仙と笹岨は広く知られた霊地である。

大峰山中の 59 の霊地については、個別の説明がなされているが、その内容は文明 18 年(1486)の年紀がある『大峰秘所記并縁起』とほぼ同様である⁽¹⁵⁾。これを見ると熊野本宮から玉置山をへて深仙に至る霊地がほとんどで、特に釈迦ヶ岳、深仙の三重滝やその周辺が多くを占めている。なお釈迦ヶ岳、深仙を護持した前鬼に関しては、その神域の四至をあげている。一方金峰山側は小笹、脇の宿、普賢岳のみである。このうち脇の宿は霊山浄土とされ、普賢岳の近くには法華経を納めた経管石があった。霊地に関わる神格では峰名には大日、阿弥陀、釈迦、十一面観音、千手観音、五大尊などがある。祀られている神格には、阿弥陀、十一面観音、千手観音の他、天部の聖天、大黒天、弁才天、荼吉尼天（稲荷）などがある。なお承久の乱の時には深仙の三重滝の白蓮花が消失し、治承の乱の際には普賢岳の経管石が光を放ち、那智の滝から三筋の血が流れ落ちたとしている。

大峰山では入峰行者是与氏女命子が諸の夜叉、羅刹女、鬼、百五十六竜王、廿竜王の守護のもとに春から夏には 100 日かけて南から北に、秋から冬には 70 日かけて北から南へと抖擻したとしている。熊野では晦山伏の式がなされている。これは 12 月晦日の夜半に伊勢の内宮・外宮、宇佐八幡、出雲、土佐女命子、住吉、伊予三島、稲荷の大明神が大峰山の南の入口（備崎カ）から熊野権現を拝礼する際、役行者が供物を調える作法で、その十代弟子が継承した式である。ちなみにこれらの神格は祈祷の神ともされている。

5. 縁起などの相伝と血脈

『大峰縁起』にはこの縁起そのものの他、役行者の誕生地に建てられた茅原堂の神領、役行者が初生の時に祀った仏舎利、晦山伏の式の相伝、灌頂の血脈があげられている。まず縁起の継承者には、役行者の母の高加茂氏女命子の系統、初代熊野本宮礼殿主是与の系統、役行者の十代弟子とその後継者がある。まず高賀茂氏の女命子は縁起を 5 代にわたってそれぞれ 19 才で相伝し、45 年間保持した上で次に渡している。そしてこれを天平 10 年（738）8 月 8 日に峰入した本宮礼殿主の是与の命子が引き継ぎ、以後その後継者が 9 代にわたって相伝した。この折も 10 代後

半から 20 才前半位に相伝し、45 年間保持して次に渡している。なおこの両相伝に関しては、相伝の儀式次第をあげている。

役行者から 10 代弟子への相伝では次のようにそれぞれ自己の出自の地に熊野権現を勧請して、そこに相伝した縁起を納めている。すなわち、2 代の義覚は葛上郡新井村、3 代義玄は同郡石井郷、4 代義真は箕面寺に権現を祀り、縁起を納めていた。その後 60 年間は継承者がなかったが、5 代目となった寿元が彦山、6 代目芳元が伊予の石撮（鎚カ）、7 代助音が淡路の譲葉に権現を祀り、縁起を納めている。この助音の時に本宮の宝殿が崩壊した。彼は寺門派の祖智証大師と共に四国を勧進して蓬莱島に宝殿を再建し、法華経を講賛している。8 代目は出羽の黒珍で石脇嶽（比定地未詳）に納め、9 代日代は紀伊愛徳山、10 代日円は白川（京カ）に納めている。この後 11 代長円が相伝し、茅原堂に納めたが、その後器量の人がいなかったため、そのままになったとしている。しかし別伝では行俊が 23 才で相伝したとしている。なお茅原堂の神領や晦山伏の式、役行者が継承した仏舎利も上記の 10 代弟子らが相承した。ただ最後の行俊は相伝した仏舎利二粒を判官公朝を通して白河上皇に献したとしている。

灌頂の血脈については寿元以下 9 人の授者とそれぞれが灌頂を受けた人の名をあげている。すなわち寿元は行信など 20 人（最後は樂与——以下受者数と最初と最後の受者の名をあげる）。それ以後芳元は 22 人（行真、誠成）、助音は 20 人（円経、有西）、黒珍は 20 人（願西、月蓮）、日代は 20 人（真智、正順）、日円は 20 人（是覚、行信）、長円は 22 人（真行、増誉）、行俊は 6 人（定宗、道誉）、静観は 8 人（性禅、貞弘）に授けている。ここでは 10 代弟子に長円と行俊が加わっている。なおこのそれぞれの伝授は「持経授」とある故、彼らが法華持経者だったと考えられる。これらのうち長円は『大日本国法華経験記』90 に天台山の僧で法華経を読誦し、不動明王を祀り、葛城山で修行後、熊野から大峰に入り金峰に登った持経者で、長久年間（1040-1044）に死亡したと記されている⁽¹⁶⁾。白河上皇を熊野御幸に誘ったのも長円だが、この死亡年と符合しない。また彼が最後に授けたとする増誉はこの御幸の先達である。なおこの血脈の最後にも行俊が見られる。

『大峰縁起』を見ると、その構成では冒頭に葛城の高賀茂氏、熊野本宮礼殿主の是与の本縁起の相伝をあげ、ついで仏舎利、茅原堂の神領などの相伝と血脈があげられている。その灌頂の血脈では役行者の 10 代弟子を法華持経者と捉えていることが注目される。内容面では熊野と大峰に重点が置かれ、熊野に関してはその本縁と神格が述べられ、役行者の伝記も熊野と結びつけている。その三生では印度の王権と仏法、日本では役行者と欽明天皇を関連づけている。さらに天照大神や神武天皇、日本の神々と熊野との関係が述べられている。また大峰山を霊鷲山や檀徳山に比定するなど法華経が重視されている。大峰山中の霊地は細かく紹介されている。特にそこに祀られている神格では大日如来、十一面観音、阿弥陀如来などとあわせて、弁才天、聖天、荼吉尼天、諸神などが重視されていることが注目される。

II 山門と修験道——『溪嵐拾葉集』

1. 『溪嵐拾葉集』の性格と光宗

中世の比叡山では山門で伝えられた天台本覚思想に基づく秘伝や口伝などを書きとめて相承する記家が、顕・密・戒と共に教学の四部門の一つとされた。この記家の集大成とも云えるものが、14世紀初期になる光宗の『溪嵐拾葉集』(以下『溪嵐』と訳す)である⁽¹⁷⁾。本書は大正新修大蔵経第76巻に叡山文庫、真如蔵本を定本とし、浅草寺本を対校本とした全117巻のものが収録されている。その内容は目録によると、顕部4(収録書数——以下同様)、密部82、戒部1、記録部4、雑記部3、計101巻21帳である。けれども大正蔵経所収本では全体が113巻で、その配列は適宜になされている。

この目録の序には「舌相言語皆是真言、身相挙動皆是密印」との天台本覚思想の基本が述べられている⁽¹⁸⁾。そして最初に天台宗の宗旨は一心三観であるとし⁽¹⁹⁾、27、28両巻では法華経廿八品の解説がなされている。また最も多い密部では不動、観音、地藏などの他に弁才天、多聞天(毘沙門天)、荼吉尼天、大黒天、聖天などの天部の諸尊、とくに弁才天の記録や秘法をあげている。また67巻の「怖魔」には天狗、68巻の「除障事」には狐病などに対する修法が見られる。

著者の光宗(1276-1350)は青年の頃比叡山に入り、延慶4年(1310)から比叡山東塔の神蔵寺で師の興円(1262-1317)と共に籠山し、彼から戒・密を学んだ。そしてこの頃から『溪嵐』の執筆に着手した。39才になった正和5年(1316)には西塔に法然が開いた別所の黒谷の青龍寺慈眼房に居を移した。この寺名は空海が学んだ青龍寺に因むもので、青龍は仏教の守護神清滝権現を意味している。その後正中2年(1325)頃から東山の鷲尾の戒家でもあった金山院に移り、建武元年(1334)頃までここで本書の執筆に勤んだ。この地名の鷲尾は霊鷲山に因むものである。彼は血脈譜には鷲尾山金山院と記され、鷲尾道光上人とも呼ばれた。そして法脈の上では興円の黒谷流に属したが、台密の穴生流、葉上流、法曼流の流れもくんでいた。なお彼は文保3年(1319)正月に記した「溪嵐拾葉集縁起」に本書の執筆にあたって就学した師をあげているが、その分野は神明灌頂3(師の人数、以下同様)、真言32、悉曇6、天台24、禅12、華嚴2、三論2、法相3、俱舍4、浄土3、医法3、俗書5、歌道4、兵法4、術法3、作業3、土巧(土木)2、算術3と多方面にわたっている。ただし修験は見られない。この就学からうかがえるように本書は百科全書的性格を持っている。

『溪嵐』の修験道に関する項目には37巻「弁才天縁起」の目次に「役行者縁起」が見られるが、本文はない。そして、109巻には「比叡山霊所巡礼記 修行記」と題して回峰行の霊地をあげている。もっとも本書には随所に修験道に関する故実や秘伝が記されている。そこでその内容を霊山、役行者と山臥、崇拝対象の順に記すことにしたい。なおそれぞれの最後に括弧を付して『溪嵐』の所収巻数、巻名、大正蔵経所収本の頁を記しておいた。

2. 大峰・葛城とその他の霊山

大峰山は金・胎両部の峰で、熊野には胎蔵権現、金峰山には金剛権現が祀られている。そして大峰の中間には両部不二の曼荼羅があって、ここから熊野までの峰は胎蔵界、吉野までの峰は金剛界の三昧耶形(三昧耶曼荼羅)である。また大峰は密蔵・華嚴の莊嚴地、大日苾芻の峰で神仙の居所である。そしてこの峰に結縁する者は不知不觉のうちに大善根を得て、入壇灌頂の功德を

具足し得る。また所々の靈窟の秘所は両部曼荼羅の相貌を呈していて、それに結縁することが出来る（巻 6, 「山王御事」 520 頁）。熊野・金峰の諸大権現は赤山明神・新羅明神と同様に仏法護持の神明である（巻 9, 「禅宗教家同異事」 539 頁）。また大峰山は靈鷲山が欠けて飛来した処で、天逆鉾の最初の本処でもある（巻 89 「私苗 都率四十九院事」 789 頁）。もっとも別項では靈鷲山の良（北東）の角が飛来して唐の天台山となり、更にその良の角が白猿に乗って比叡山に来たとしている（巻 8, 「山王御事」 518 頁）。

葛城山は法華の峰で宿や靈窟に法華經廿八品の名が記されている。葛城山（金剛山）には曇無竭菩薩（梵語の音訳、法喜菩薩）が祀られているが、役行者はその化身である（巻 108, 「真言秘奥抄」 867 頁）。熊野は日本の浄土で熊野権現に一度参詣すると、極楽往生が保証される。特に本尊の証誠殿を拝すると、上品上生の往生をとげることが出来る。ただ参詣にあたっては十戒を守り、精進潔斎しなければならない。その参詣の作法は仏道修行にもとづくとしている（巻 6, 「山王御事」 520 頁）。

大峰山の天川弁才天は日本第 1 の地藏弁才天で、第 2 の巖島の妙音弁才天、第 3 の竹生島の観音弁才天と共に浄土の三弁宝珠に比せられる日本三大弁才天で、この三大弁才天の在所は地下の穴に通じている。そして「天川縁起」によると、天川が湖だった時、ここに善竜と悪竜がいた。善竜は弁才天で箕面の弁才天と一体である。彼には 15 人の子がいて、第一子は大汝（釈迦の垂迹日吉大宮権現）、第二子是小汝（薬師の垂迹春日大明神）、第三子は阿弥陀如来の垂迹熊野権現である。ところが悪竜が毒気を吐いて大汝が殺された。そこで小汝が悪竜を藁目の矢で射て降伏させた。悪竜は湖水の水を巻き込んで天に昇り、その後が大きな丘になった。これが今の天川であるとしている。この天川は大峰山中の弥山にある奥院の天川弁才天をさすと考えられる。弥山は須弥山の略で、そこに設けられた宿は『大峰縁起』の「大峰宿の次第」では「吉野熊野」とされていた。この天川で役行者が修法をし、弘法大師もしたことを敷衍して、大師は役行者の再誕であるとしている。また天川、巖島、竹生島、江の島、箕面、背振山の弁才天を六所弁才天としている。この中の江の島弁才天には泰澄が籠り、背振山も修験の靈山である（巻 37, 「弁才天縁起」 625-626 頁）。

富士山は四方が円満で頂上は八葉の形をしている。この八葉は不動明王の頂の蓮華を意味する。また富士の高根に月を観じることは、自己の身体に阿字を布置し、その意義を観想する「布字観」を思わせるもので、富士の山名はこの「布字」に因んでいる。また高く秀でた富士山は金剛界、横に平たい武蔵野は胎蔵界である。そして武蔵野の小丘が集まって富士となり、富士の谷水が武蔵野を潤している。両者は不二の曼荼羅であるとしている。このほかでは越中の立山を麓から地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、声聞、縁覚、菩薩をへて阿弥陀如来に至る十界具足の妙法開顯の地とし、地獄に落ちた罪人も立山の浄土で往生しうる。また伯耆大山の鎮守は僧形の不二の地藏菩薩で、弥勒出生の時には、この山が崩れて多宝塔が湧出するとしている（巻 92, 「雑記」 799 頁）。

3. 役行者と山伏

役行者は密教第三祖の金剛菩薩（執金剛）とされ、遺骨は笙の岩屋にあり、山上ヶ岳には卒塔

婆がある。その本地は 500 由旬に亙って大乘の流布に努めた葛城一の宿の二上山南谷の靈窟に座す曇無竭菩薩（法喜菩薩）である。かつて葛城山を巡礼した鑑真（688-763）は、鬼神の姿をした多聞天の化身の葛城山の守護神深沙大王が、曇無竭菩薩の法会を知らせる鐘を鳴らすのを聞いて参加したという（巻 6, 「山王御事」 520 頁）。『大峰縁起』には役行者は聖徳太子と一体であると記されている⁽²⁰⁾。『溪嵐』にも、本文はないものの「役行者太子一体事」の見出しがある（787 頁）。太子は大神宮（天照大神）の再誕ゆえ、大峰山の役行者につながる。また靈鷲山の一角が飛来した大峰山は天の逆鋒の本拠でもあったとしている（巻 89, 「安養都率事」 789 頁）。これは伊勢皇大神宮の心御柱を天逆鋒と捉える鎌倉初期成立の『大和葛城宝山記』の記述と類似している⁽²¹⁾。

役行者は一言主神の讒言によって伊豆の大島に配流されたが、その時島の上に急に五色の雲が棚引いて、六臂の天女が亀に乗って二童子を伴って現れた。その後、園城寺 65 世の道智（1217-1269）が大島に籠って法華経を誦した時、竜女が現れた。その後を追うと富士の人穴に導かれたという（巻 37, 「弁才天縁起」 625-626 頁）。役行者には義覚、義玄、義真の 3 人の護法がいた。うち 1 人は前立で後の 2 人はそれぞれ水瓶と鉾を持って随従し、役行者に給仕した。このほか白山を開いた泰澄は臥行者、立行者を使役したが、この 2 人は真俗二諦、定恵二徳を示す。また北嶺修験の祖の相応は不動明王の使者で常にその眷属の八大童子を随従させると共に乙護と若護の二童子を使役したとしている（巻 87, 「護法事」 783 頁）。

山伏は峰中で地獄、餓鬼、畜生の三途の世界で八難の苦行のうちに甚深の妙行を修めて内面的な悟りを得る。その行体は袈裟は不動袈裟、頭襟は不動の頂の蓮華というように不動明王を表わす。ただ秘伝では山伏の柿衣は辰狐の色、不動袈裟の俱利伽羅が圍繞しているのは弁才天、頭襟は胎蔵の蓮華で聖天の三摩耶というように、茶枳尼天、弁才天、聖天の三天の相貌を示すとしている（巻 6, 「山王御事」 520 頁）。このうちの不動袈裟を弁才天とするのは、俱利伽羅不動の剣にまつわりつく話を水神の弁才天と解してのことと思われる。また山伏は天狗と見なされてもいる（巻 67, 「怖魔私苗」 730 頁）。

山伏の字義とも結びつくものに山王の字義の説明がある。それによると、山王の「山」の字は、縦の三画（丨丨丨）を横の二画（一）で繋いでいる。また「王」の字は、縦の二画（丨丨）で横の三画を結んでいる。これは山王の文字を通して、縦にもあらず、横にもあらず、一にもあらず、三にもあらず、一心三観であることを示すとしている。また山は衆山第一の須弥山、王は諸経の王の法華経をさすとしている（巻 8, 「山王二字釈事」 526 頁）。この一心三観は、空・仮・中の三諦をひと思いに一時に祈念するという天台教学の基本をなす考えである（巻 3, 「天台所立宗旨」 509-510 頁）。後述するように「山伏二字義」でもこの解釈がなされている。

3. 崇拜対象

崇拜対象に関してはさきに山伏の衣体と結びつけて説明された不動明王、茶枳尼天、弁才天、聖天に関する口決を紹介しておきたい。不動明王には生身不動（釈迦）、法身不動（大日）、初住不動（除蓋障）、等覚不動（金剛手）の四種があり、それぞれ利益衆生、諸法総体、断煩惱、施作用の効能がある。そして矜羯羅、制多迦両童子など八大童子を眷属とし、智火を示す火焰を背

おう降伏の本尊ともされている。また阿弥陀如来、地蔵菩薩と一体で毘沙門とも関わるとする(巻33,「不動四種身事」以下611-615頁)。そして不動明王の真言を唱えて加持をして、童男、童女に神霊を憑依させる阿尾捨法⁽²²⁾や、不動明王の慈救呪を用いて行う「狐病治事」の切紙をあげている(巻68,「除障事」732頁)。

茶吉尼天は智証大師の相承によると、本地は尊星王(妙見菩薩、北極星)、垂迹身は新羅明神で使いは辰狐である(巻105,「仏像安置事」853頁)。そして三井寺では金剛童子の秘法は茶吉尼天と一体になることを学ぶものとしている(巻39,「茶吉尼天秘法」631-633頁)。弁才天では天川・巖島・竹生島の三大弁才天の縁起をあげている。また弁才天を竜神の宇賀神と結びつけている(巻37「弁才部」625-628頁)。聖天は象形の男性(白色、障碍神、智)、女性(赤色、福神、慈悲)が抱きあっている像容で、智悲不二を示す。また男性は大日如来(実者)、女性は十一面観音(権者)で、両者が抱きあっているのは、権実不二を示す。聖天は愛染明王と一体であるとする。また聖天に油を注いで祀ることにふれている(巻43,「聖天秘法」641-643頁)。

最後に上記の『溪嵐』所収の修験に関する記述をさきの『大峰縁起』と比較しておきたい。すると霊山では大峰山を重視していることは共通している。ただ大峰山を霊鷲山に準える事とあわせて、天逆鉾と結びつけていたことが注目される。また『大峰縁起』が大峰山中の霊地を列挙し、深仙周辺の霊地を詳細にとりあげたのに対して、天川弁才天とその奥院の弥山の伝承のみがあげられていた。そして巖島、竹生島さらに箕面、江の島、背振山の弁才天と修験との関わりが指摘されていた。これは光宗が弁才天に関心を持っていたことによると考えられる⁽²³⁾。なお富士山、立山、白山、伯耆大山など他の霊山も紹介されていた。

役行者は『大峰縁起』では大唐第三の仙人で、金剛山の法喜菩薩、金峰山の大政威徳天、箕面の龍樹菩薩、不動明王の化身とされていた。『溪嵐』ではこれに加えて、金剛菩薩、(執金剛、密教二祖)空海、聖徳太子と関係づけられていた。特に太子との関係を通して天照大神と結びついたり、大峰山を天逆鉾としてそれと伊勢神宮の心御柱を関係づけていたことが注目される。なお役行者や泰澄が使役した2人の護法を真俗二諦、定恵二徳としていることは、聖天の抱きあっている男女を智悲不二、権実不二としているのと同様に天台本覚思想にもとづく説明である。

山伏の衣体の意味づけは、『大峰縁起』には全く見られなかったが、『溪嵐』では全体としては不動明王、その柿衣は辰狐、袈裟は弁才天、頭襟は聖天を示すとしていた。前者は広く知られているが、後者は『溪嵐』独自のものである。さらに本書ではこの三天の他に大黒天、多聞天(毘沙門天)などが巻をたてて詳論されていた。これらの諸天は『大峰縁起』の山中の霊地でも見られたもので、中世後期以降、各地の修験霊山でも祀られていた。なお山王の字義を一心三観で説明する論法は後述する『修験修要秘決集』の山伏の字義にも見られるものである。

Ⅲ 修験教典の形成——『修験修要秘決集』

1. 即伝と『修験修要秘決集』

『修験修要秘決集』(以下『修要秘決』と略す)は日光出身で金峰山で修行後、彦山南谷華蔵院の客僧となり、正大先達の承運に師事した阿吸房即伝が大永年間(1521-1528)に完成したも

のである。本書は近世期には修験五書の第一とされ、元禄 4 年（1691）に不慧が校訂し翌年刊行した⁽²⁴⁾。その後寛政 10 年（1798）に薩摩の般若院が刊行した。この寛政 10 年の刊本を定本にしたものが、『修験道章疏』II に収録されている。全体は巻上、衣体分 12 通、浅略分 7 通、巻中、深秘分 7 通、極秘分 7 通、巻下、私用分 7 通、添書分 7 通の切紙から成っている。ただ原本にはこのほかに最極分 3 通があり、全体が 50 通から成っていたが、不慧がこれをはずして刊行した。この 3 通は『彦山修験秘決印信口決集』の最初にあげられている「修験道四重阿字大事」「五箇証文」「修験阿字八箇証義」とされている⁽²⁵⁾。そこで以下『修要秘決』の内容を簡単に紹介して『大峰縁起』『溪嵐』の修験に関する記事と比べておきたい。もっとも『修要秘決』には『大峰縁起』や『溪嵐』については、何一つふれられていない。それ故以下の類似点は私見に基づくものである。

2. 『修要秘決』の内容

巻上の「衣体分」では、頭襟、斑蓋、鈴懸、結袈裟、法螺、念珠、錫杖、縁笈、肩箱、金剛杖、引敷、脚半の山伏 12 道具を紹介し、その教義上の意味を次のように天台本覚思想や密教をもとに説明している。すなわち斑蓋、鈴懸、笈と肩箱、金剛杖、脚半は金胎不二、頭襟は凡聖不二、念珠は煩惱即菩提、引敷は無明即法性、結袈裟は十界一如、錫杖は宝塔、法螺は阿字門に導くことを示すとしている。このように「衣体分」では主として不二の思想をもとに山伏 12 道具の意味を説明しているが、この試みは『大峰縁起』『溪嵐』には全く見られないものである。

「浅略分」は「依経用否」「修験用心」「邪正分別」など、修験道の宗系に関するものと、成仏論から成っている。これらも『大峰縁起』『溪嵐』にはないものである。その内容は修験の依経は法爾常恒の経で、宗旨は無相三密、十界一如の理を知ること、修験は顕密不二、煩惱即菩提の立場に立つとしている。ちなみに即伝の『修験頓覚速証集』でも、修験の立場を十界一如としている。成仏論では、即身成仏（始覚）、即身即仏（本覚）、即身即身（始本不二）の三者を立て、この身このままを無作の三身とする即身即身を理想としている。これは『溪嵐』で山門では無作の成仏を理想としていることに対応している（巻 45、「即身成仏事」649 頁）。

巻中の「深秘分」では、山伏の「山」の字の縦三画（丨丨丨）を報身、法身、応身とし、これを横一画（一）で結ぶのは三身即一を示すとし、「伏」の字は法性を示すイ（人）と、畜生ゆえ無明である「犬」から成るゆえ法性・無明不二を示すとする。またヤマブシの表記のうち「山伏」は始覚、「山臥」は本覚、「修験」は始本双修、諸国の諸山をめぐる「客僧」は始本不二を示す。そして本覚である「山臥」の方が、始覚の山伏より優れているが、始本不二の客僧を最上としている。次いで山伏の髪形の剃髪・比丘形は応身、摘髪は報身、長髪は法身を示すとしている。なお「不動十界の事」の項では山伏は不動明王の直体で十界本具の極位を示すとし、その個々の行相を十界のそれぞれに充当させている。これは『溪嵐』が山伏の行体は不動明王を示すとしたり、山伏の修行を地獄・餓鬼・畜生の三途と関係づけたのを展開したものである。「法螺両緒の事」では修験者が腰に巻く二本の螺の緒を、胎金不二を示すとしている。なおこの切紙で「本覚讚」を引用していることが注目される。このように「深秘分」では『溪嵐』に見られた山伏の説明が天台本覚思想をもとにより詳細になされている。

「極秘分」は峰入に関する切紙である。最初の「峰中十界修行の事」では、まず『大峰縁起』にも記されていた順、逆の峰入を、春の順峰は従因至果・胎蔵界・無明、秋の逆峰は従果向因・金剛界・法性の峰入とし、両者を行なうことにより因果不二、無明法性不二の境地に入るとしている。そして夏の峰入を順逆不二の峰としている。また『大峰縁起』や『溪嵐』と同様に大峰を胎・金の曼荼羅としている。その上で大峰を十界同居の霊場とし、ここで地獄・業秤（十界の地獄に充当された修行、以下同様）、餓鬼・穀断、畜生・水断、修羅・相撲、人・懺悔、天・延年、声聞・四諦、縁覚・十二因縁、菩薩・六波羅蜜、仏・正灌頂、の十界修行をすることによって入峰者は十界互具の存在になりうるとしている。そしてこれに続けて、床堅、床精、闍伽、小木の作法や碑伝について解説し、最後に正灌頂と柱源をあげている。この両者は龍樹（150-250 頃）が開塔の源記を役行者に授けたものとするが、六大本具の印明と柱源誦文をあげるのみで、詳細は口伝としている。なお龍樹開塔の源記のことは『溪嵐』にも記されている⁽²⁶⁾。

巻下の「私用分」は灌頂と入峰印証状、血脈などから成っている。最初の「灌頂啓白」の項では、入宿、業秤、穀断・正灌頂、出生を四度灌頂とし、これを不動灌頂ともいうとしている。ここでは峰入全体を灌頂とし、それを不動灌頂と名づけていることが注目される。「添書分」ではまず役行者の伝記と尊形の特徴を述べている。その伝記は『大峰縁起』『溪嵐』と違って、役行者の母が独鈷を呑んだ夢を見て受胎し、妊娠中は青い衣を着た弁才天が守っていたこと、役行者が箕面の瀧穴で龍樹から無相の三密の印璽を授かったことを記している。尊形では役行者は両部不二の直体で、不動明王の尊体でもあるとしている。なお役行者の絵符の図像が靈鷲山を示す鷲の形の岩を背にして、その像容が園城寺の鎮守、新羅明神と酷似していることに注目しておきたい⁽²⁷⁾。次いで葬祭に関する切紙が納められている。そして最後に修験道の衣体、位階、峰中の作法や法具に関する 299 の語と読みをあげた「山用名類集」が付されている。なお版本と『修験道章疏』所収本で略された最極分 3 通の切紙は「阿字」に関するものである。

3. 『修要秘決』に納められた切紙の形成

『修要秘決』収録の切紙には、伝授者や受者は記されていない。また『大峰縁起』のように先行の書物をほぼそのまま引用する形もとっていない。ただ所収の切紙の記述の中に本記（5——言及件数、以下同様）、秘記（35）、伝記（27）、御口説（8）に曰くとした引用が認められる。この四者の作者とその年代の考証はかつて試みたので、詳細はそれにゆずり、以下の記述と関わる事項のみをあげておきたい⁽²⁸⁾。

まず「本記」は「秘記」に引用されているので、それ以前と思われるが、作者は定かでない。「秘記」は『修要秘決』に先行する『修験三十三通記』の「衣体分」「引敷之事」に「秘記云獅子者運載義也、所乗獅子無明也」とある⁽²⁹⁾。ところが『修要秘決』ではこの部分が「解曰、所乗獅子無明也」とある。そして『修要秘決』の別写本の『修験道切紙』では、この解曰に「蓮覚行者」と割注している⁽³⁰⁾。それ故、秘記の作者は蓮覚と考えられる。この蓮覚は永徳 3 年（1383）に彦山で大廻行（回峰行）を始めた 21 代彦山座主蓮覚と思われる⁽³¹⁾。それ故「秘記」は 14 世紀後期、それに先立つ「本記」は 14 世紀中期のものとして推定される。「伝記」は『修要秘決』「衣体分」「結袈裟事」の項に「右秘決者依_智光行者伝記_」とある故、作者は智光である。この智

光は「彦山修験伝法血脈」にあげる即伝（16世紀初頭）の師阿光の先代の智光が該当する⁽³²⁾。それ故15世紀中期に成ると考えられる。「御口説」は『修要秘決』『衣体分』の「斑蓋之事」「法螺之事」に「御口説曰」とあり、『修験道切紙』ではこの「御口説曰」の次に阿光と割注がある故、15世紀後期の即伝の師阿光と思われる。

そこでこの四者の成立年代をもとに『修要秘決』の各切紙のこれらの引用を根拠にその成立順序を推定すると、次のようになる。まず14世紀中期に「本記」に見られた順・逆、花供の峰入、山伏・山臥・修験・客僧の四種名義の解釈、金剛杖を金胎不二の塔婆とする説明が成立した⁽³³⁾。次いで14世紀後期に「秘記」と記された蓮覚の「極秘分」の十界修行、小木など峰入関係、「深秘分」の山伏名義、結袈裟を始めとする衣体の説明、血脈、役行者の伝記や尊形が定まった。そして15世紀中期に「伝記」所掲の衣体、床堅、閻伽、小木、正灌頂、柱源などの峰中の秘儀が成立した。特に衣体分は彼によって完成されたと考えられる⁽³⁴⁾。その後15世紀末には阿光の御口説に見られる十界修行、床堅、衣体の具体的な説明と葬祭の作法が整えられたと考えられる。そして各期ごとの切紙への引用数から見ると『修要秘決』所収の切紙は14世紀中期から15世紀中期に成立し、特に蓮覚が重要な役割をはたしたと考えられるのである。

ところで最初に成立した峰入関係の切紙を多く含みながら、その作者が定かでなかった「本記」は、即伝が当初修行した金峰山に伝わった切紙と推測される。というのは、即伝は建長6年(1254)に内山永久寺の旭蓮が先師の口説33通をまとめた『峰中灌頂本軌』のうちの12通と⁽³⁵⁾、彦山に伝わった6通をもとに『彦山峰中灌頂密蔵』を編集していたからである⁽³⁶⁾。その12通は床堅、十種形儀、峰宿、床定、柱源、無想三密、一心三観などに関わるものである。これらは形をかえて『修要秘決』や『三峰相承法則密記』にもとり入れられている。特に柱源に関しては、即伝はこれを独自に展開させて、『柱源秘底記』を著している⁽³⁷⁾。もっとも『峰中灌頂本軌』の成立年代はその内容から見て、14世紀中頃と見られる。このように即伝の『修要秘決』や『三峰相承法則密記』には、彼が金峰山で授かった切紙の影響も見られるのである。

近世期の修験教典の多くはこの『修要秘決』の注疏やその一部をとりあげて解説する形で展開した。すなわち近世初頭にはその詳細な注疏である『修験記』10巻、『修要鈔』5巻が著わされた。また衣体・法具の部分をもとめた『修験宗法具秘決精註』、山伏の字義をとりあげた『山伏二字義』が作られた。そして幕末期には当山派の碩学行智の弟子行阿による『修要秘決伝講筆記』も著わされた。ただこれらについてはかつてとりあげたのでそれにゆずり⁽³⁸⁾、ここでは『修要秘決』を『大峰縁起』『溪嵐』と比較しておきたい。『大峰縁起』は熊野権現や金剛蔵王権現の本縁や神格の説明、大峰山中の霊地や『大峰縁起』などの相伝が重視されていた。けれども本書では峰入やその作法、修験道の宗旨、依経など、修験道の確立をみざすものが多くなっている。また『溪嵐』の山伏や修験の説明に見られた天台本覚思想は『修要秘決』では随所にとり入れられて、その説明の基調をなしているのである。

IV 三井修験道——寺門伝記補録

1. 志晃と『寺門伝記補録』

近世に入ると寺門派の園城寺ではその末寺の聖護院門跡が本山派の統領となったこともあって、寺門派の歴史の中に修験道を位置づけることが必要とされた。こうした状況の中で 18 世紀初頭園城寺の学僧慶音院志晃（1662—1720）は長吏の命に従って『寺門伝記補録』（以下『寺門補録』と略す）を著わした⁽³⁹⁾。なお彼にはこのほかに『寺門伝記撮要』6 巻、『智証大師年譜略頌』1 巻などの著書がある。

本書は天智天皇 7 年（668）から応永 4 年（1397）に至る寺門派内部に関わる事跡、史伝を叙述したものである。全 20 巻から成り、1 巻から 5 巻が祠廟部（新羅明神祠など）、6 巻から 9 巻が聖跡部、10 巻から 17 巻が僧伝部、18 巻から 20 巻が雑部となっている。修験道に関しては、第 17 巻僧伝部の「役優婆塞」の項と、第 18 巻雑部甲の「三井修験道始」の項にまとめて記されている。本書は仏書刊行会本の大日本仏教全書 127 巻（鈴木学術財団本は 86 巻寺誌部 4）に『園城寺伝記』とあわせて収録されている。後者は鎌倉末期から南北朝初期になる園城寺の草創から正安年間（1299-1302）の事歴を随筆風に記したものだが、修験道に関する記述はほとんど見られない。『寺門補録』17 巻の「役優婆塞」の項は、役行者伝、葛城山、大峰山、熊野三山、「修験行人十六道具」、「修験家諸物名言類字」から成っている。次の 18 巻「雑部」甲の「三井修験道始」の項は智証大師に始まるとする三井修験道の伝承と歴史である。この配列は志晃が修験道は役優婆塞を始祖と仰ぎ、葛城、大峰、熊野三山を道場とし、法典や儀礼を整えていたことを記したうえで、その中心となったのが三井修験道であると主張したことを示している。そこで以下この順序でその内容を紹介する。

2. 役優婆塞、熊野と修験道

役優婆塞の項ではまず『続日本紀』の文武天皇 3 年（699）の条の葛城山で修行し、呪術に秀でた役小角が韓国連広足の讒言で伊豆に配流された記事をあげる。ついで彼が大寶元年（701）に勅免を得て帰京し、箕面山の大滝の上方の小滝から昇天したとする。その 140 有余年後、智証大師は役行者の跡を慕って、葛城、大峰、熊野三山の峰入を始めた。さらにその 250 年後、三井寺の増誉、行尊が峰入修行をし、ともに熊野三山検校に補され、修験行者の長者となった。爾來三井寺（園城寺）が役氏の正統を受け継いでいるとする。また『元享釈書』15 の役行者伝をもとに、行者が葛城山の巖窟に 30 余年にわたって籠って松果を食して修行し、孔雀明王の呪を持ちて五色の雲に乗って仙府を優遊し、日本全国の靈地を修歴して鬼神を使役したとしている。

ついで『修験道秘記』をもとに、役行者が法華経を読誦し、序品の菩薩が勇猛心を持って深山に入って仏道を思惟したとの文に接して、家を捨てて山に入って精進したとする。そしてこれに割注を付して、役行者は仏陀が靈鷲山で法華経を説いた時、集まった大衆が仏陀の眉間の白毫から発した光が東方万 8000 世界の人々や神々の三乗の作業を照し出したのを見たとの話に感動した。そして仏陀の深山に入って思惟する仏の道は、中道の真理に通じる精進修行であるとの教えを聞いて真理を求めて山に入って修行して大菩薩となった。けれども修験道を語る人は役行者を支仏（単独で修行する行者）としている。たしかにその行相は支仏だが、彼は真理を悟り、菩薩の行を修めている。それゆえ役行者は、声聞・縁覚だけでなく、内に菩薩の思いを秘め、法華経

を実践する力を得た大士である、としている。

葛城山の項ではこの山名が、神武天皇の大和入りを侏儒の土蜘蛛が妨げた、そこで皇軍が葛の網で捕えて殺したとの神話に因んだ葛木の村名に基づくとの話をあげるのみである。大峰山は金峰山の一峰で深仙とその周辺を指す。その山名は巍峨とした高大な山形を意味する。大峰山は往昔に飛来した故、飛来峰と号したとする。そして『大峰縁起』所掲の大峰山の釈迦ヶ岳、神（深か）仙岳やその周辺の 26 の岳、峰中の不動、聖天、茶吉尼天、笙の岩屋などの九つの窟をあげている。この後に「峰中宿次第」、「大峰八大童子の在所」、「熊野五所王子（藤代、切目、稻持、滝尻、発心門）」を記すが、熊野王子を大峰五所王子と表記していることが注目される。

次いで『大峰縁起』をもとに、役行者の熊野権現の教えにもとづく熊野から金峰への順峰、金峰での一夏九旬の採花汲水と三世の諸仏の供養、その後の金峰から熊野への逆峰をあげ、行者がこの順・逆の峰入を 45 年間に互って 33 度したとする。また『大峰縁起』所掲の役行者の母が熊野で月を飲んだと観じて受胎し、葛城の茅原で行者を生んだ話をあげる。ただ継体天皇の后が同時に受胎して欽明天皇を出産した話は見られない。なお『園城寺伝記』第 4 の「高祖大師御入峰事」の条には、役行者は龍樹菩薩の化身、法喜菩薩の再来で、白鳳から慶雲に至る 70 年間三峰で修行したとしている⁽⁴⁰⁾。

熊野三山に関しては、『熊野縁起』をもとに、那智、新宮、本宮の三所権現と五所王子、四所明神の本地と相関をあげる⁽⁴¹⁾。そしてその後に那智の鎮守として、礼殿執金剛神や熊野五所王子、准五所王子に湯峰金剛童子、石上の新羅明神、飛鳥大行事大宮を加えた 11 社とそれぞれの本地、新宮の鎮守として神倉権現、飛鳥大行事、三狐神など 17 社をあげる。なおこのうち神倉の靈窟には熊野権現の使令の八咫鳥が祀られているとする。ただ本宮の鎮守に関しては、未考としている。続いて熊野三山の諸神の異説や造営の記事を記すが、ここでは割愛したい。

「修験十六道具」の表題には、割注を付して已下は「彦山法則」をもとに取捨したとしている⁽⁴²⁾。ここでは山伏十六道具を三相に分け、常住の衣体八相（頭襟、鈴懸、念珠、結袈裟、錫杖、法螺、柴打、火扇）、これに斑蓋、引敷、脚半、草鞋を加えた十二相の駟路の衣体、さらに縁笈、肩合（箱力）、走索、金剛杖を加えたものを入峰十六相、この十六相から火扇、柴打、走索、草鞋を除いたものを十二道具としている。「修験家諸物名言類字」は、修験道の用語 275 字を列記し、その読みと一部のものについて簡単な解説を付したものである。その内容は既述の『修要秘決』の「山用名類集」とほぼ同内容のものである。

3. 智証大師と三井修験道

巻 18、雑記甲の「三井修験道始」の項によると、智証大師（円珍）は承和（834-848）の頃、役行者の跡を慕って大峰と葛城を修行後熊野にむかったが、鬼神や魍魎にさまたげられた。そこで心は無相にして、神呪を唱えて進んだが行路を失った。その時法華経の「化城喻品第 7」にある大通智勝仏の十六童子や八咫鳥が来て導いた。その助けで無事証誠殿に至り、昇殿して七日間に互って法華経 8 巻を講讀して靈感を得た。これが三井修験道の始まりである⁽⁴³⁾。このことは「那智三卷記」または八卷記と名付ける書物に記されているとする。

その後増誉は堀河上皇、白河上皇の先達を務め、熊野三山検校に補された。増誉は聖護院を創

始し、そこに熊野三所権現を勧請して修験道を弘めた。また2代熊野三山檢校行尊は笙の岩屋で冬籠りした。そして園城寺の長等山を大峰山に準えて毎年峰入をし、山麓に熊野三所権現を勧請した。平治元年(1159)には園城寺34世行慶(1105-1165)が三井寺の中院に熊野三所権現を勧請して修験道の鎮守とした。後白河上皇は永暦元年(1160)に覺讚を先達として熊野御幸され、洛東に熊野三所権現を勧請して新熊野社とし、覺讚を檢校とされた。爾來熊野三山檢校が当社の檢校を兼任した。日本六十余州の修験道場と行人はすべて三井修験道の末流である。このように智証大師が役行者の後、大峰・葛城・熊野三山で修行して以来、三井寺が修験道の正統を受け継いでいる。また熊野三山檢校は寺門派が代々継承した。そして寺門派では、顯・密・修験の三道を鼎立して聖朝を護持し、国家を鎮護していると述べている。

上記のように『寺門補録』では『大峰縁起』をもとに、役行者が熊野権現の導きで、順・逆の峰入りや採花汲水の行をしたとしている。その際、『修験道秘記』を引用して、役行者が特に法華經に導かれたことを強調している。また『大峰縁起』と同様の役行者伝をあげるが、欽明天皇とむすびつけてはいない。熊野権現の説明では『熊野縁起』を用いて那智と新宮の鎮守をあげている。また智証大師が熊野詣をして、証誠殿で法華八卷を講じた話は秘書の『那智三卷記』(八卷記とも)にもあるとしている。このほか那智の鎮守に礼殿執金剛神、湯峰金剛童子、五所王子、石上新羅大明神をあげるといように、那智に重点が置かれている。また園城寺の行尊が同寺の長等山を大峰に準え、熊野権現を勧請したこと、行慶が園城寺中腹に熊野三所権現を勧請したこと、後白河上皇が東山に那智権現を勧請して新熊野社を創設したことなどはとりあげているが、上皇がやはり那智権現を祀った聖護院の院家筆頭の若王子社についてはふれていない。これは園城寺の三井修験道が本山派の統領で熊野三山檢校の聖護院より正統なことを示そうとしたのかも知れない。なお役行者の伝記、山伏十六道具、「修験家諸物名言類字」は『修要秘決』にもとづいているが、『溪嵐』との関わりはあまり見られない。また天台本覚思想にもとづく説明は、当時の安楽律による戒律復興運動の動きや、史伝書という性格もあって、「名言類字」の山伏四字義に見られるのみである。

結

以上本稿ではまず修験道成立期の『大峰縁起』、次いで天台本覚思想の影響を受けた山門の『溪嵐』の修験道に関する記事を紹介した。その上で修験道確立期の經典『修要秘決』の内容と成立過程を検討し、『大峰縁起』や『溪嵐』と比較した。そして最後に顯・密・修験の鼎立を説いた園城寺の志晃の『寺門補録』所収の修験記事を紹介して、上記三著との関わりを指摘した。そこで最後にこの四者の特徴と相互関係をまとめておきたい。

『大峰縁起』はその表題が示すように、大峰・熊野・金峰の縁由と役行者の三生、靈地の説明と縁起の相伝や血脈に重点が置かれていた。熊野権現鎮座譚では神武天皇の承認、役行者伝では欽明天皇との関わりに見られるように、修験道と王権を結びつける試みがなされていた。今一方で大峰山を靈鷲山に準えるなど随所に法華經の影響が認められた。また大峰山中では深仙周辺が強調され、山内の靈地には弁才天、聖天、茶吉尼天が祀られていた。

『溪嵐』では大峰山中の靈地では天川弁才天が強調されていた。また役行者と聖徳太子との一体化を通して、行者を天照大神や伊勢の皇太神宮と関連づけていた。なお山伏の衣体に関しては不動明王だけではなく、荼吉尼天、弁才天、聖天とも結びつけていた。そして随所に天台本覚思想に基づく説明が見られた。

『修要秘決』は即伝が当山方に伝わったと思われる「本記」や彦山の蓮覚の「秘記」、智光の「伝記」、阿光の『御口説』などを引用する形で作った切紙を、修行の進展に応じて浅略から極秘分にと与える形で編集したものである。これらの切紙は初期は峰入のもので、それに宗義、衣体の説明が加わる形で成立していた。ただ縁起やその相伝を重視する『大峰縁起』とはその内容を異にしたが、その説明の多くは『溪嵐』同様天台本覚思想に基づいていた。

近世中期の『寺門補録』では智証大師が役行者の活動を慕って、大峰・葛城・熊野で修行し、本宮証誠殿で法華八講を開いて三井修験道の祖となったとしている。ここでは聖護院を本寺とする本山派に対して、智証大師を祖とする三井修験道の独自性が説かれている。けれどもその内容は『大峰縁起』の役行者伝や『修要秘決』の山伏十六道具、役行者伝、語彙集をほぼそのまま用いている。

このように修験道の教典は『大峰縁起』に見られる熊野の縁起、大峰の靈地、役行者伝、『修要秘決』の峰入に始まる切紙を基盤に成立した。なお山門の『溪嵐』には『大峰縁起』の影響は認められるが『修要秘決』との関わりはあまり見られない。ただ大峰に限らず富士、白山、立山などの靈山もとりあげ、役行者を多様な神格と結びつけている。なおそこに見られる天台本覚思想は『修要秘決』の説明の基調をなしていたが、『寺門補録』にはほとんど認められなかった。このように修験道の教典形成には法華経の信仰や天台本覚思想が密接に関わっているのである。

付記

本稿は 2014 年 7 月 5 日に行われた東洋大学国際哲学研究センター主催の「文字化された宗教教典の形成とその意味」連続研究会第 1 回の発表を書きおろして、注を付したものである。

註

- (1) 当時の法華持経者に関しては『大日本法華経験記』、『往生伝・法華験記』日本思想大系 7, 岩波書店, 1974 年, 菊池大樹『中世仏教の原型と展開』吉川弘文館, 2007 年を参照。
- (2) 村山修一「天台修験道の成立」, 読史会編『創立 50 周年国史論集 3』読史会, 1954 年。
- (3) 幸運『北嶺行門記』日本大蔵経 96。なお幸運は寛政年間(1789-1801)に回峰行をしている。志晃『寺門伝記補録』大日本仏教全書 127, 仏書刊行会, 1915 年, 256 頁。
- (4) 天台本覚論に関しては田村芳朗『鎌倉新仏教思想の研究』平楽寺書店, 1965 年, 田村芳朗『本覚思想論』春秋社, 1990 年 参照。
- (5) 『熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記』、『熊野金峰大峰縁起集』臨川書店 1990, 8-10 頁, 23-24 頁。
- (6) 『金峰山雑記』修験道章疏 I, 474 頁。

- (7) 『聖門御累代記』『深仙灌頂系譜』, いずれも修験道章疏Ⅲ所収。
- (8) 行智『木葉衣』(天保3年〈1832〉) 修験道章疏Ⅲ, 222頁。
- (9) 宮家準『『大峰縁起』の内容と思想』, 宮家準『修験道思想の研究』増補決定版, 春秋社, 1999年。
- (10) 『諸山縁起』, 『寺社縁起』日本思想大系 20, 岩波書店 1975年, 90-102頁。
- (11) 文治元年(1185)9月日付, 五師所下文(春日神社文書第226号), 文治2年12月5日付, 勸学院政所下文(同225号, 517号), 建久2年(1191)卯月15日付, 興福寺別会所下文(大東家文書第4号)。
- (12) 上掲『熊野金峰大峰縁起集』131-157頁に天理本の影印。165-187頁に京大本の川崎剛志による翻刻があげられている。
- (13) この真福寺本の3著は上掲『熊野金峰大峰縁起集』所収。なお『大峰秘所記并縁起』(竹林院蔵)は, 五来重編『修験道史料集Ⅱ』名著出版 1984年, 133-140頁所収。川崎剛志による上掲書 131-220頁の解説参照。なおこれらには鎌倉期から室町期の「熊野の本地譚」, 聖徳太子伝などの影響も認められる。牧野和夫『中世の説話と学問』和泉書院, 1991年, 466-489頁, 伊藤潤「中世太子伝に見られる修験性 —— 太子・役行者・聖宝」『伝承文学研究』54, 2004年 参照。
- (14) 上掲『諸山縁起』, 『寺社縁起』112頁。童子の在所は同書 115-116頁。
- (15) 小田匡保「大峰の霊地伝承史料とその系譜 —— 秘所一覧と四十二宿一覧を中心に」『山岳修験』4, 1983年。
- (16) 上掲『往生伝・法華験記』172-174頁。
- (17) 田中貴子『溪嵐拾葉集の世界』名古屋大学出版会, 2003年 参照。
- (18) 『溪嵐拾葉集』大正新修大蔵経 76巻, 507頁。
- (19) 即伝の『修験頓覚速証集』では諸宗の立義として, 天台は一心三観, 真言は阿字不生, 修験は十界一如としている。修験道章疏Ⅱ, 449頁。
- (20) 『大峰縁起』には役行者を聖徳太子と一体とする記述は見られない。ただ伊藤潤が指摘したように当時天台宗では役行者を聖徳太子の後身としたり, 一体とする中世太子伝がとり入れられていた(伊藤上掲論文)。
- (21) 『大和葛城宝山記』修験道章疏Ⅲ, 381頁。
- (22) 阿尾捨法は修験道の巫術を代表する憑祈禱につらなるものである。宮家準『修験道儀礼の研究』増補決定版, 春秋社 1999, 343-372頁。
- (23) 田中貴子, 上掲書 15-16頁。
- (24) 修験五書は智光・蓮覚編『修験三十三通記』2巻, 即伝『修験修要秘決集』3巻・『修験頓覚速証集』2巻, 秀高『役君形生記』2巻(以上修験道章疏所収), 著者不詳『修験指南鈔』1巻(『神道大系』104『修験道』所収)。
- (25) 『彦山修験秘決印信口決集』修験道章疏Ⅱ, 516-517頁。
- (26) 『溪嵐拾葉集』巻31「四箇大秘法」, 大正新修大蔵経 76巻, 609頁。
- (27) 宮家準「新羅明神と役行者」, 宮家『神道と修験道』春秋社, 2007年, 282-312頁。

- (28) 宮家準『修験修要秘決集』の成立と展開, 宮家上掲『修験道思想の研究』増補決定版 1003-1023 頁。
- (29) 『修験三十三通記』修験道章疏Ⅱ, 416 頁。
- (30) 『修験道切紙』慶応義塾大学図書館蔵。
- (31) 「彦山靈仙寺境内大廻行守護神配立図」英彦山神宮所蔵文書。
- (32) 『彦山修験伝法血脈』修験道章疏Ⅲ, 410-411 頁。
- (33) 即伝の『三峰相承法則密記』でも宿着, 宿出, 法螺, 十種所役, 十界一如, 三峰相配, 柴打, 峰中血脈など峰入関係の切紙に「本記」の引用が多く認められる。
- (34) 近世初頭の『修要鈔』には「役行者入峰建立開山也, 智光行者衣体建立之祖師也」とある(『修要鈔』中の下, 7 丁)。
- (35) 『峰中灌頂本軌』修験道章疏Ⅰ所収。
- (36) 『彦山峰中灌頂密蔵』修験道章疏Ⅱ所収。
- (37) 『柱源秘底記』, 『阿蘇・英彦山』神道大系 50。
- (38) 上掲宮家『修験修要秘決集』の成立と展開」参照。
- (39) 大日本仏教全書の鈴木学術財団版の解説には本書を室町中期の志晃撰とし, 成立年を応永 4 年(1397)頃としている。ただし『日本仏教人名辞典』法蔵館(1992 年)には志晃の生年を 1662, 没年を 1750 としている。そこでその内容も考慮して本書の成立を 18 世紀初頭とした。
- (40) 「高祖大師御入峰事」, 『園城寺伝記』三之四, 大日本仏教全書, 仏書刊行会本, 41-42 頁。
- (41) 『熊野縁起』には数多くのものであるが, 本書の内容は熊野那智大社蔵の江戸中期の写本の『熊野山略記』(滝川政次郎他『熊野』地方史研究所(1957 年)所収と類似している。
- (42) ここでいう「彦山法則」は書名ではなく, 前項であげた『修要秘決』など当時彦山で編まれた書物をさすと考えられる。
- (43) 宮城信雅「智証大師及其の門流と修験道」, 村山修一編『比叡山と天台仏教の研究』山岳宗教史研究叢書 2, 名著出版, 1975 年。